

HAJIMENI

立島大学総合学芸学部

それから蓮実は顔を上げ、

「僕ばかりじゃない。みんなも同じです。いっさい、ものは考えないことにしています。四高の柔道部へはいると、はいつた日に上級生から言われます。学問をやりに来たと思うなよ、柔道をやりに来たと思え！ 女はこの世にないものと思え！ いいか、いっさいものは考えるな！」

それだけ言うと、蓮実が残っているカツレットを頬張って、

「うまいなあ、これ」と言った。内儀さんは手を叩いて、れい子と呼ぶと、カツレットのお替りを命じて、

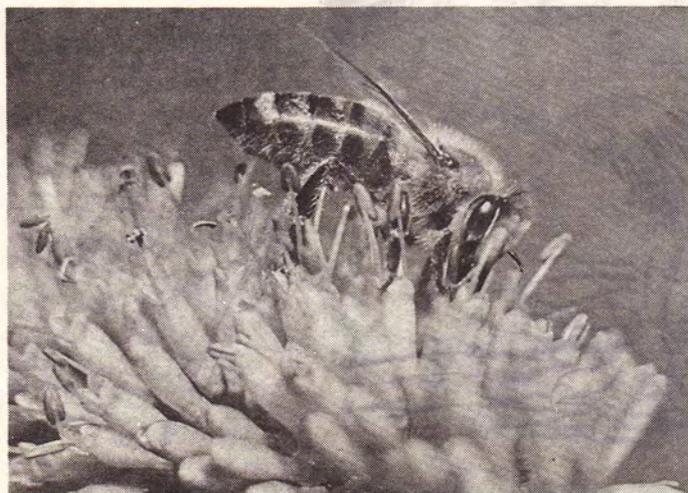
「こんどのは、わたしが御馳走してあげる」と言った。そして暫くしてから、ふいに溜息をついて、

「それにしても、たいへんな学校ね。よくそんなところへはいる者がいると思うね。勉強もしないで柔道ばかりやって」

「そう思うでしょう。僕もそう思う。だから考えたらだめなんです。考えたら、柔道なんて、やれませんか。別に柔道家になるわけじゃない。高専大会で優勝することだけが目当なんですからね。でも、練習量がすべてを決定する柔道というのを、僕たちは造ろうとしている。そういう柔道があると思うんです。そういう柔道があるかどうかは、僕たちが自分でやってみないことには判らない。それをやろうと思っている。僕などは体は小さいし、力はないし、素質は全くない。四高へは行って、初めて柔道着というものを着た。練習量にものを言わせる以外、いかなるすべもないわけです。どうです、協力してくれませんか。僕にはまだ高専大会が二回ある。二回のうちで優勝したいんです。あなた方も一生のうちの三年間をないものと思って四高の道場で過してみませんか」

蓮実と言った。洪作は黙っていた。黙っていたが蓮実の言葉は体中にしみ渡っており、軽い醜態感が洪作を包んでいた。

——井上靖 『北の海』より



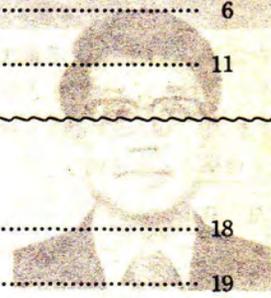
目次

——「総合科学部」——

「総合性」について	式部 久	1
こんな講義をおすすめします	編集部	2
今いちばん言いたいこと		6
卒論を書き終えて	太田(環)・住野(環)・河合(地)・佐々木(地)	11

シリーズ 学問ノススメ

その4 学問の意味・大学の意味	小林 文 男	18
その5 文化人類学	清水 昭 俊	19
その6 随 想	小野 寛 晰	21



Calendar of Freshmen

——総合科学部の1年間——	編集部	23
---------------------	-----------	----

自由投稿

「私の問題意識」に対する私の問題意識	薩 摩 芋太郎	26
見直そう食べ物からの有害物質	黒 岩 祐 治	28
ソフトボール大会始末記	吉 田 明	35
学部の記録		36
編集後記		37

表紙 環境3年 大橋健造

「総合性」について

— 学部創設五周年に当たって —

広島大学総合科学部長

式部 久



総合科学部が創設されて五年が経った。昨秋は学部創立五周年と大学院二研究科の発足を記念して、講演会などの記念行事を行なったが、それにしても「歲月人を待たず」の感が強い。こうしているうちに第二期生を送り出さねばならず、つづいて第六期生、大学院第二期生の入学を迎えねばならない。教官陣容の整備はほぼ終わったものの、もう次なる博士課程設置の仕事である。

この一年間、以前にもまして国内国外の多くの人々にむかって「総合科学部」なるものの説明をしなければならなかった。国外でいえば、アメリカの国会図書館長をはじめ、学術振興会の招きで来訪されたさまざまな国の多方面の学者たち、国内でいえば、それぞれに改革プランを練っている他大学の教官、それに大学紛争後十年ということで記事を組んだ時事通信や朝日新聞など。朝日ジャーナルも近く来訪予定という。昨年三月には米英独仏の大学を七校ほど歴訪して教育論を交わしたが、そこでも「総合科学部」の説明を求められるのが普通だった。Integrated Arts and Sciences と呼ぶその呼び名には多くの人が興味を示したが、ワシントンのGeorgetown Universityでは、カトリックの大学らしく、というべきか、「何を基礎にしてインテグレーションを行なうのか」と質問された。

そうした場合、学部の機能やコースの内容を説明するところまでは、まず無難であるにしても、インテグレーションの根底にあるものということになると、そう簡単ではない。

一般教育の機能と専門教育の機能を併せもつ学部であること、両者の融合が努力目標であること、学部生の教育に当たってはリベラル・エデュケーションの理念を基礎とすること、具体的には地域文化・社会文化・情報行動科学・環境科学の四コースがあ

り、学際的なカリキュラムによる広い視野の研究教育が行なわれていること等が、学部についての私の説明の第一段階になるが、問題はその後である。

いうまでもなく、われわれの総合科学部の場合は、例えばジョージタウン・ユニヴァーシティが「ジェズイット・スクールの伝統に則って」というように、特定の立場にもとづいて「総合」や「インテグレーション」を考えているわけではない。もし立脚点というべきものがあるとすれば、「現代文化や現代の学問、さらには現代の教育に対する一般的な反省にもとづいて」というほかないであろう。学問研究が高度化し精密化するにつれて、それが細分化されすぎてきたのではないか。そうした細分化は、新しい知識や技術の獲得には好都合だとしても、個々人を部分的な世界に埋没させ、視野狭小で想像力貧困な人間を育てているのではないか。特定領域については厳密な知識をもちながら、広い展望に立った判断や思考はまるでできない人間がふえている。——こうした反省は、洋の東西を問わず、現代もっとも一般的に聞かれる批判である。

イギリスの作家であり評論家であるC. P. スノーが「二つの文化」なる評論によって世論をわかせたのは、もうかれこれ二十年も前のことである。近代の科学技術革命を興したサイエンスの人々と、文学を中心とする人文領域の人々の間には、ほとんど相互理解や交流というべきものが見られない。自然科学の世界での新しい発見や理論が文科系の大学人の話題になることはめったになくて、文学者は多くの場合技術革新に原理的否定の姿勢をとるし、科学者もまた多くは文化的伝統について共感や理解をもつことがない。——彼はそのように論じて、イギリスの教育制度が、他国のそれに比べても、早い時期から専門教育に傾斜しすぎていて、理想とすべき総合的教養の育成にほど遠い現状であることを歎いていた。

スノーのその論は、科学技術革命への楽観論に貫かれていて、その点は現代の感覚でいえば古いというべきかもしれない。しかし、かれのいう二つの文

化——自然科学系の学問と文科系の素養——が互いに無関係にそれぞれの世界に安住して、相互にコミュニケーションの場をもたない限り、これからの社会の発展に見通しのある方向づけを与えることはできないというその点は、間違っているとはいえないだろう。

われわれの学部のいう「総合」は何か特定の立場に立つものではないと私はいったが、しかしその背景には、スノーの評論に見られるような、人間の総合的な英知への期待がこめられている。単に「何々の学科と何々の学科を併せて学びました」といった形の学際性ではなく、人間生活の実態——人間をとりまく自然的社会的環境の仕組みや情報の獲得伝

達の構造、諸国民の文化的伝統の諸相について、総合的な知見や判断力を養うということである。

いうまでもなく、困難な課題である。とくに、それを大学レベルのカリキュラムにどう結びつけるかは、正直に言って、われわれが未だ実験段階にあることを否定できない、複雑さをもっている。しかしこの困難な課題を追求することなしには、われわれの総合科学部もその存在意識をうしなうであろう。

多くの新しい教官をむかえ、学部教育五ヶ年の経験をつんだこの段階で、こうした問題について一層活発な論議がおこなわれることを期待したい。

(ヨーロッパ研究 教授)

こんな講義をおすすめします

編集 部

(序 文)

今年もまた、卒業生を送り出す頃となりました。そこで飛翔編集部では、昨年と同様に四年生(49・50生)を対象としたアンケートをお願いし、ここにその回答をまとめてみました。

今回のアンケートは、前回のものを参考にして、より簡潔なものをと心がけ、質問も二点のみにとどめました。まず、講義に関する質問では、後輩に勧めたい講義とその他講義全般についての感想や要望、それに開講してほしかった講義を書いていただきました。まだ歩み始めたばかりの総合科学部にあっては、完全なものと言える状態でないわけで、四年間(五年間)、総科で学んでこられた先輩方の授業を受ける側からの貴重な声は、今後の講義内容、カリキュラムの充実をはかる上で、またこれから学ぶ私達にとっても、肝に命じておくべき忠告ではないで

しょうか。

それから、もうひとつは総合科学部について(あるいは、これに全く関係なく)、個人的な感想、ほやき言など思いのままに書いていただきました。

このアンケートは、一応49・50生の方全員を対象にしたのですが、こちらの不手際もあり、最終的に集まったのは約40名分の回答でした。少々寂しさととられながらこの集計を行なっていたのですが、出てくるいろいろな意見に触れるにつれて、やっぱりアンケートをやった良かったなあとしみじみ自己満足(?)にひたっている次第です。

昨年の暮れからこの1・2月というとても忙しい時期に、こうしたアンケートに回答を下された四年生の方々には大変お世話になりました。どうもご協力ありがとうございました。

